とある世界の死神の問題

旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある世界の死神の問題

【Ｎコード】
Ｎ６９８４Ｎ

【作者名】
旅人

【あらすじ】
少年デス。異世界デス。ソシテ、少年ガ死神ニナリマシタ。

プロローグ（前書き）

この文は読まなくても、1話から読んでも、普通にいけます。めんどくさいと思いますので、暇な時にでもどうぞ。

プロローグ

この宇宙に存在する銀河系のひとつ。
その中にある太陽系のひとつ。
その内の惑星のひとつ。
そこに存在する国のひとつ。
そこのどこかの町のひとつの
とある夜の話。

夜でも明るく、晴れていても星の見えない。人があふれる町並み。
そこから、少し離れたところに居酒屋で、常連が出入りしている。

千鳥足の男。暗闇の道を歩く。
後ろにひとつの人影。男は気づかず鼻歌まじり。
人気のない道。影が動く。影は男に近づき、鞄をひったくる。
近くにバイクが止めてある。男は叫ぶ。ひったくりはバイクに飛び乗る。

全速力のバイク。暗闇の道を走る。
赤信号を無視。トラックを抜き去る。
角を曲がり、アジトへ戻る。

ひったくりは、そうする予定だった。
そして、そうなるように定められていた……はずだった。
それなのに……

運命は、運命と呼ばれるシナリオは、
書き換えられた。

全速力のバイク。暗闇を走る。
赤信号を無視。トラックを抜き去る。
角を曲がり……
ぶつかった。何かに……

バイクが転がる。ひったくりも転がる。

そして……

プロローグ（後書き）

はじめまして。旅人です。
なんともまあ、よくぞこんな長たらしく意味不明な文章打てたなあと、
思います。詩みたいな・・・
まあぼちぼち頑張って文章力成長させますんで、よろしくお願いします。

問．1異世界ってなに

おれは、
生きているのか。
暗い。いや明るい……？

「生きているのか」声を出す。
目を開ける。

さて、ここらへんで説明させてもらおう。
俺の名前は神原勇人（かんばらはやと）。高2。
俺の通う高校はなんと言うか普通じゃない。
「喧嘩＝最高の遊び、娯楽」といった荒れた学校なんだ。女子もやる。だから我が校の生徒はなんかボロボロ。（まさかとは思うがここで「口喧嘩だ！」と思っている人はいるまい）
平均で週3回。多い人は、週5回くらいする。遊びだからだ。

まあ、俺は平和主義者だから、喧嘩は売ったことない。
でもよく挑まれる。割と逃げにくい状況で。
んで、なぜか負けない。今んとこ1回しか負けたことない。
まあ、そんな普通じゃない高校で、普通に（学校の中では普通じゃないけど）生活してたんだ。俺は。
俺んこと大体分かってくれたかね。
んじゃ、ここらへんで終わらせてもらおう。

「なんじゃこりゃ」
そこは俺がいた町ではなく、見たことない場所だった。
何もなかった。

草も樹も、風も匂いも、空も地面も。な～んもなかった。
景色はただ、黒のようで、白のような、どちらとも見分けがつかなかった。
「やっぱ俺、死んだのか」

「ようやくお目覚めかい？」いきなり声がした。
「っ！？」びびるよねふつー。
そこにいたのは、黒いローブに、仮面を付けた人だった。ヤツは言った。
「おはよーさん。私、死神」
「は！？」
「だから、死神だってば」
「え？」
「だーかーら。死神だってば。S・I・N・I・G・A・M・I！！」
「いやいやいやいや冗談きt「くどい」　怒られました。
「いやあんた、全然死神っぽくないし」
「人を見た目で判断するな」鎌を取り出しやがった。
「どうもすいませんでした」
「よろしい」　ん？ということは・・・
「・・・じゃあやっぱ俺死んでるじゃねーか！！」
「んー、正確にはそういう意味じゃないだよね」
「？？？」どゆこと
ヤツは流水のごとく語りだした
（読まんくていいっす）「まあ、かいつまんで言うと、あんたは、今私が創りだした世界にいるんだけどここはあくまで臨時で創りだしたせかいでほんとは別の異世界に召喚されたんだよね原因は不明でしかも元の世界では還れないなぜならあんたの運命は途切れてしまいもとの世界では死んだことになってるし・・・

「もうちょっとかいつまんでください」
「そうだねぇ、んっとね。世界で起こる出来事はさ、全部神様が決めたシナリオに従って進んでるんだ。いつ生まれ、いつ死ぬか。いつ出会い、いつ別れるか。いつ結婚し、いつ挫折し、いつその世界に住む者が奇跡と呼ぶ事が起こるか。とかさ」
「んじゃ、奇跡的に助かったってのも」
「そう、でも、キミはそのシナリオをはみ出ちゃったんだ。ほんとは、ほんとにあの時死ぬはずだった。で、キミは向こうの世界では、死んだことになってる。でも、ここで生きてる」
「かいつまんでもよくわからんな」
「そう？でもキミが今しゃべっているその言葉もシナリオにないものなんだ。今からキミがとる全ての行動が」
「んじゃ、俺が起こす行動の全てがあとあとのシナリオに「かなり影響を与える事になるね」わお」やばくね？
「まー神々は、これになんかの意味があるとおもってる。影響があるっつってもあんたがこれから行く世界だけだからね」
「そういや俺が行く世界って」
「おーそうだった。じゃ、いまからいくか」
「いやっちょま「出発」

問．1異世界ってなに（後書き）

文章って難しいですね
会話多すぎ
まあ、精一杯がんばります。

問．2　「鎌」の読み方をすべて答えなさい

「到着ー」
「速いな」一瞬だった。
そこには草原が広がっていて、彼方に城壁っぽいものが見える。
なんかいかにもって感じな風景。
「・・・なんか実感ないけど異世界なんだよな。ここ」
「まあね。でも異世界の実感ならすぐわいてくるよ」

草原で何かがこちらへ走ってくる。
「ほらね」そいつは現れた。
「何じゃこりゃ！？」そいつは赤毛で、首が三つあるオオカミみたいなやつだった。
なんかいかにもって感じの怪物。
「ケルベロスだね。なかなかの強敵だよ」
言ってる場合か。これをどうせーっちゅーねん。
「キミが倒すんだよ。
　私はこの世界の生物には干渉できないし、向こうも私のことは見えない。シナリオでそう決められてるからね」
ケルベロスが飛びかかってくる
「無理無理無理！！」のをかわしながら叫ぶ。
だって武器とかないし
「でもキミになら干渉できる。」
「なら、助けてくれ！」噛みつき三連撃をかわす。
「何がいい？」次は引っ掻き。
「何でも、、いいから早く！」今のは危なかった。
「んじゃ、これで」なんか取り出した
（棒？）とりあえず受け取って振る

それは、よく見ると鎌だった。
そして・・・

死ぬかと思った
俺は勝った。ヤツは悲鳴もあげれずに吹っ飛んでいった。
「いやー、おつかれさん」それにしても
普通あんな飛ぶ？
「それにしても、よくかわしきったな」と死神がいった。
俺の喧嘩スタイルは『かわし』と『さばき』だったから、まあうなずける。いやいや
「なんか俺の力増えてない？」
「そうみたいだな」
「なぜ？」
「ＷＡ☆ＫＡ☆ＲＡ☆Ｎ」
「なんか怖いんだけど・・・」急に強くなるとか。
「異世界来た時の影響じゃね？てか、この世界ふつーに大剣もったまま2メートルジャンプとか。あるから
とかなんとか
もう、泣きたい・・・
「それよりその大鎌に、名前をつけてあげなよ」
名前って
「それはもう君のものだから、名前を付けると結びつきが強くなるんだよ」
「へぇ～」
名前ねぇ・・・
鎌・・・か。
「・・・レン」
名前を呼んだ瞬間、そこに死神とお揃いのローブの少女が現れた。
う～ん、慣れちゃったね。こういうの。

「・・・・・」無口っぽい人だった。
「へぇ、人の形をとるとは、随分結びつきが強いようだね」
「そうなの？」
「うん、人形は万能だからすごいんだよ
どこがどう万能なんだろうか。
しゃべらないし。
女の子だし。
武器だし。

ＲＲＲＲＲＲＲＲＲ♪
電子音が鳴った。
「はいもしもし」死神の携帯だった。
死神が携帯。
慣れてもツッコみたくなるよね。こういうの。
「はい。はい。あー、そうですかー。はい・・・」
なんかしゃべりだした。
レンの方をみると、
目が合った。
とりあえず
「こんにちは」と言ってみた。
挨拶は基本でしょ。
「・・・こんにちは」
しゃべった。
慣れても素直に驚くよね。こうゆうの。

死神の電話はどうやら終わったようだ。
「いやぁ～、神様に呼び出されちゃった。
　ということでいっぺん私は戻るから」
え？
「後は勝手にがんばって★」

そういってヤツは消えた。
いやいや、勝手にって、
どうすんのさ。

「・・・ねぇ」レンがしゃべった。
「ご主人様の名前はなんて言うの？」
そーいやまだ知らなかったか
「俺は神原勇人。よろしく」
「・・・」
「あと、ご主人様じゃなくて、はやとって呼んでくれ」
「・・・うん」

「・・・ハヤト」
「どうした？」
「・・・おなか減った」
「ん、そうか」
ん？こいつ武器じゃなかったっけ？
んー、慣れても疑問に思うことあるよね。
「じゃあ、町までいくか」
というわけで俺の異世界での生活が始まった。

あの城壁、
結構遠いな・・・

てかまたモンスター来てるんじゃね？

問．２　「鎌」の読み方をすべて答えなさい（後書き）

いやー
会話文多いですね。
こんなんでやっていけるのか
はなはだ不安です。

問．3　地獄に仏はいると思いますか？

困った。

今、俺とパートナーのレンは、ある町の中を歩いている。
いく当てもなく。
もはや放浪者に近い。

町についたのは、死神と別れてから、だいぶ経ってからだった。
なにせモンスターに数が多い。
もう二桁以上の戦いをこなしたはずだ。
その距離およそ3キロメートル。
レンは武器だからいいとしても、俺は既にぼろぼろである。

まあ、そんなわけで、町についたのだが、なにぶん腹が減ってしまった。
だってあんだけ激しい運動したんだし。
というわけで飯の在処を探し始めた。
で、あることに気がつく。
はい。お察しの通り。
金がないのである。
なんもできねえ。
という訳で今に至る。

「あー、腹減ったな」何回、いや何十回目かのつぶやき。
「・・・うん」レンがうなずく。いや武器って腹減るのか？

と、十何回目かの疑問を浮かべたとき
「おい、そこの兄ちゃん」と屋台を出していたおっさんが声をかけてきた。
「？」どうやらお好み焼きっぽいものを売っているようだった。
「あんた、腹減ってるんじゃないかい？よかったらうちで食べていきな」
何回か同じことを言われたが
「えっと・・・僕らお金がなくて・・・」
というと相手にしてくれなくなるんだ。
「あー、いーよいーよ。つけといてやっから」・・・。
「え？」
「今度きたときに返してくれりゃあいいんだ」あれぇ？
「えっと・・・」もう焼き始めていた。あれぇ？
地獄に仏・・・か。すばらしい言葉だ。

そのおっさんはアグラと名乗った。
毎日この辺りで屋台を出しているそうだ。
この食べ物は、この世界では『デホロイ』と言うらしい。
うまかった。
「あんた、稼ぎに困ってるなら、ギルドにでも入ったらどうだい？」
「ギルド・・・」やっぱあるんだね。
「ああ、この道をもうちょっと行けばつくさ。そこで武器とかならもらえるから」
なるほど。ギルドならいいかも。
「まあ、素人にはこの町ん中で配達とかしか受けれねえけどな」
レンは早くも三枚目に取りかかっている。
「あんまり食いすぎんなよ」
「ん・・・ぐ・・・」全部ほおばっている。
「あー、急がなくていいから」
「ぷはっ・・・」

もう食い終わったのかよ。
「はっはっは！いい食べ方だ。俺は気に入ったぜ！」アグラさんが笑った。
いい笑い方だ。

食い終わった後、俺はアグラさんに礼を言って店を出た。
んで今、俺はギルドに来た。
「ここか・・・」
上を見上げると、看板に何か書いてあったが、
（読めねぇ）
会話はできるのだが、どうやら字は読めないらしい。
今更ながら異界の言葉をしゃべれるようになっているとは・・・
「・・・『ぎるど：さらまんだー』って書いてある・・・」
とレンがつぶやいた。
「へぇ・・・」
とりあえず、入ってみた。

「ようこそ、サラマンダーへ」とカウンターに受付っぽい女の人がいた。
なんともまあ、ゲームっぽい。
「あら、あなた初めての人ね。何の依頼かしら？」
「えっと、ギルドに入りに来たんですけど」
「あらそう！じゃあ、ランク取得試験を行うわよ？」
「ランク？」そして試験だと？
「そ。ランクはGからAまでとSがあって、最初の試験ではFランクまでの取得ができるわ。つまり、どんだけ楽勝だったとしても最初はFにしかなれないってこと」
「なるほど」
「じゃあ、ついてきて」
「今から下級モンスターと戦ってもらうわ。武器は・・・何にする

？」いやいや
武器持ってるけど。戦うだと？！
「えーっと・・・」ここでレンを鎌にするのはマズいんじゃね？てか戦うとかきいてねぇし！
「・・・斧」レンが差し出してきたし。
「（・・・一番鎌に近い）」なんか妙にやる気まんまんだし。
「斧にするのね？」今更無理とか言えねぇし・・・。
「んじゃあ、斧にします」
「おっけー、っと連れの子は？」
「・・・私は戦わない」えマジ？
「そう」いいのかよ！？
「んじゃ、ついてきて」「・・・ハヤト。がんばって」
ちくしょおおおおぉぉぉ。

あれ
なんかこみ上げてきた。顔に水分が集まっているような気がする。
なんでだろう。あれぇ？

問．3　地獄に仏はいると思いますか？（後書き）

こんな文章誰が読むんですかね。
毎度ながら自分の文章力に目が痛くなります。目が。

問．４　岩石を粉々にするのに必要なものは？

血の匂い。
骨肉のくだける音。
叫び。
嘆き。
折り重なる骸。
狂気の気配。

「AHAHAHAHAHAHAHAHAHAHAHAHAHAHA
HAHA！！！」

・・・おれは、なにをしている

はい。
というわけで、ギルドに入りました。
えぇ、えぇ。楽しかったですよ（泣）
まったく。いきなり戦闘なんて（涙）
下級モンスターなんぞめったためたにしてやりました（号泣）
はい・・・（滝涙）

「はぁっ、はぁっ」
「・・・お疲れ。ハヤト」レンがやって来た。
「ぐすっ、えぐっ」俺は泣けてきた。いや泣いていていた。

「・・・大丈夫？」
「大丈夫だ問題ない」
「いやー、お疲れ」受付さんがやって来た。
「おめでとう。あなた達は今日から　Ｆ　ランクよ」
「Ｆ・・・」
「ま・・・実力的には　Ｃ　くらいだと思うし、すぐにランクアップするわよ」

・・・で、ギルドの仕事ってのは要するに、だされている依頼を受けて、こなす。
という、まさにゲームとかにありそうなやつなわけで。
単純明快。
受付さんの話によると
「はい、じゃあ早速依頼受けて来なさいよ」
ということでしたので、半ば強制的に依頼を受けたわけで。
はい。

んで、今。
俺たちは、町から出ている。受けた討伐依頼は『ストーンドレイクを討伐せよ』とのことだった。
泥でできた１メートルくらいのトカゲらしい。
ちなみに依頼内容は　Ｆ　ランクくらいらしい。ちょうどいいよね。

「なあレン」
「・・・何」
「俺さ、この世界に来たことは分かったんだけど
それ以外のことがなんもわからんのだけど。
教えてくれ」
「・・・例えば？」

「んー、この世界の名前とか、さっきの町の名前とか」
「・・・この世界の名は、アノニムス。さっきの町は、プロゴス・・・」
「へー、そうなのか」
「うん」
それからしばらくは無言で歩くことになった。
なにせ、レンはしゃべる方ではないし、
話題が途切れたからだ。

そして、俺はこの世界に来るまでのことを思い出していた。

ストーンドレイクが棲むという岩山は高さにして百メートル弱くらいでそこには、木一本さえ、草一本さえ生えていなかった。
岩と土のみでできている。そーゆー山だった。いや、傾斜のゆるい崖だった
「結構険しいな」
「うん」
「んじゃ、いくか」
俺はレンの手を取った。
「・・・」
「ん？どうした」
「・・・なんでもない」
「そうか、ストーンドレイクとやらがどこで出てくるかわからんからな。なんか気づいたら言ってくれよ」
「うん」
というわけで登ったのだが、生き物がいる風でもなく、モンスターがいないので楽と言えば楽だった。
しかしストーンドレイクが現れる、
なんてことはなく、頂上についた。

そこには、岩がごろごろところがっていた。
そして、ちゃんとヤツもいた。
「おいおい・・・」
それは、トカゲなんて形容からはほど遠い、
いや別のものと言っていいほどだった。”ドラゴン-- と言えばしっくりくる。
「でっか・・・3メートルくらいあるじゃねぇか。てゆーかあれは・・・」
依頼内容には『泥の』というのがあったが、ソイツはストーンそのものだった。つまり岩だ。

『ギロリ』
「ヤベッ」（感づかれた!!）

「「「GOGYAAAAAAAAAAA!!!!!」」」

「なんかちがうなんかちがうかくじつにぜったいになにかがちがう!!!!」
俺がさっきまでいた場所はヤツの自慢の尻尾（武器）で粉々になった。
「レン!!」「・・・了解」
鎌になったレンを握る
「あれって切れるのか?」
『・・・傷をつけるぐらいなら』ヤツはこっちに向かって来た。
「だめじゃん!!」手を振り上げた。

ガインッ!!

「ひえええ、あっぶねええ!!」

ギギギギッ
「そぉい！！」
ガッ！！

「「「「GLLLLLrrr・・・」」」」いやー怖いーお家帰りたいー

「せいやっ」
ギンッ
「クッソ、切れねえ」
「「「「GRRRAAAA」」」」
「うあっ」
ガンッギッゴガン！
「ッくそ・・・」
ブンッ！！

ガッ
「これってヤバいんじゃね？」
てかヤバいだろ・・・

いやーギルドでハンマーとかメイスとかもらっときゃよかった

問5　何故・・・？

ストーンドレイクは、まだまだ元気。俺たちは、そろそろ限界。
叩いても、殴っても、斬りつけても、無駄無駄無駄。
なにやら無敵（チート）級の回復力を持っているようで、かすり傷なんか一瞬で見えんくなるし。
破壊的な殺意をまとった尻尾、爪、顎。
うん、もう無理♪

「はぁっはぁっ・・・くそ」
とまあ俺はあきらめ悪いんで、無理っつってもまだやっとるわけで。
いやまあ、正確にはやられてると言うべきか。

ガィン！！

「「「GRRRRR」」」
やべぇ尻尾が・・・

ガッ！！

『・・・ッ！』
「レン！？大丈夫か・・・！？」
鎌とはいえ相手は岩だ。レンもかなり傷ついているのかもしれない。
『・・・大丈夫。それより、アイツさっきから腹をガードして戦ってる・・・』
「ってことは腹が弱いのか！？」
『・・・！ハヤト！』

「「「GRRRRAAAAAAAA!!!」」」
「うわっと！」
アブねえ、アイツの腹をどうにかして攻撃しないと、これ以上の長期戦はレンにダメージが蓄積するだけだ。
俺の体力だって馬鹿にならん。
どうやってガードを解けば・・・

ーーーーーーーーーーーーー

俺はまだ戦っていた。
「くっそ、ガードが解けねえ！」
また尻尾か。あれ食らったら一発で終わるな・・・

ッガツ

『・・・ック』
レンももうもたない。
いつ限界がくるかわからない。
モンスターの方もだいぶいらついているようだ。
はじめより攻撃に専念しているせいか、ガードが甘くなっている。
しかし

ガスッ
「「「GYAAAA」」」

「っ、だめか！」
すさまじい回復力で傷はすぐに塞がってしまう。コイツを倒すには一撃で決めなければならない。
「「「GRRRRKHOOOOOOOO」」」
（なんだ？）

いつもと違う鳴き方だ。あごを上に向けている。息を吸い込んでいる？
（まさか・・・）と思った時だ。
ッゴオオオォォォォォォォォ！！
炎のブレスを間一髪かわした。まさに「一髪」。おかげで髪が少し焦げた。
「あんなもんも出せんのかよ」
続く攻撃もかわす。
「「「GRRRRRRRRR！！」」」

『・・・あぐっ』
レンのうめきが聞こえた。
「レン！」やばい、このままじゃ
『大丈夫・・・大丈夫だから・・・っ』

ッッブン

「ッッッ！」
つづくモンスターの攻撃をかわし、レンを抱えて岩陰に隠れた。
幸いにも、ストーンドレイクは獲物がどこへいったかわからないようだ。
「ハヤト、私は、大丈夫だから」レンはヒト型になっていた。
「んなわけないだろ。どう見てもボロボロじゃねぇか」
「まだ、戦えるから、ハヤト、一人じゃ、勝てない、よ。私は、ハヤトを、護る、ための、武器、私が「今日はよくしゃべるな。いつもそのくらいしゃべってくれると気が楽なんだがな」
レンは黙って俺を見つめた。

「お前は、俺の唯一無二のパートナーだ。お前が居なきゃ、俺はこのワケもわからん世界で独りになる。それにくらべりゃ、今ちょっと一人でがんばるなんて、楽なもんだ」
「・・・何、言ってるの・・・？私は、ただの「安心しろ。俺の護りたいもんは俺が護る」

ーーーーーーーーーーーーー【レン】

私は、ただ主人に仕える武器、道具にすぎない・・・
私が壊れても、死神様が新しい代わりのものをつくれる・・・
私はただの道具、それだけの存在・・・
代わりなんていくらでもいるし、私が消えて困ることはない・・・
だから私は・・・

彼は言う「お前は、俺の唯一無二のパートナーだ」唯一無二なんかじゃないのに。
彼は言う「お前が居なきゃ、俺はこのワケもわからん世界で独りになる」代わりなんていくらでも居る。
彼は言う「それにくらべりゃ、今ちょっと一人でがんばるなんて、楽なもんだ」何故？この今にだって、代わりは用意できるのに。

何故、一人で戦おうとするの・・・？
何故、微笑むの・・・？
何故、そんなに明るいの・・・？
いったい・・・

何、言っているの・・・？」

だって・・・私は・・・

「私は、ただの
道具(つくりもの)

「安心しろ。俺の護りたいもんは俺が護る」
何故？どうして？なんで？
あなたは私が護る道具なのに。あなたが護るなんて。何を？
あなたが護りたいのは、何？私も、あなたとともにそれを護るべきなのに。

彼は言った「いいから、黙って休んどけ・・・お前は俺が護るさ」
そういって岩の竜に立ち向かっていった。

私を(こんな道具)、護るの・・・？

すぐ近くで、もののぶつかる音がする。たくさんの岩が壊れる音も、地面がえぐられる音も、数少ない木や草がなぎ倒される音も、何かが吹っ飛ばされる音も、それが転がる音も、立ち上がる音も、再び立ち向かう音も。

ああ。護られるのは、護るよりも痛い。辛い。
でも、こんなにも安らかで、暖かい。

何故・・・私は眠ろうと、して、いる、の・・・？

ーーーーーーーーーーーーー【勇人(ハヤト)】

もう、ヤバい。
体力、ってかスタミナ・・・？それがもう限界。
てかここまでがんばれた事に驚き。いや、この世界来た影響か・・・

。
めっちゃ体が丈夫になってるんよね。
うん、でももう限界。
もう、ヤバい。

まあ、レンに無理させたんは俺やし、しょうがないよね。

「「「「ＧＲＲＲＲＲＡＡＡＡＡＡＡ」」」」
強力な尻尾攻撃で地面がえぐられる。
「・・・っく」
石やら、砂やら飛んでくるし。

どうすんの？

「「「「ＧＲＲＲＲＲＯＯＯＯＯＯＯ」」」」
続いて体当たり＆つめ攻撃で周りの岩が吹き飛ぶ。
「っぐあ」岩やべえ、いてえ、てか俺は不死身か。岩たたき割ったぞな。

どうすんの？

「「「「ＧＵＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ」」」」
さらにブレスですべてさっきまで居た所は黒こげになる。
「いいっ？」あれは死ぬっしょ。溶けるし。

どうすんの俺っっっっ！？

ストーンドレイクはいよいよ苛立ちをあらわにした。一回いっかいの攻撃の威力が増しているようだ。ガードにはところどころスキが

見えるが、攻め込むより速く連続攻撃を仕掛けてくるので、まるでダメージを与えられない。

ッブン
ブォンッ
ドゴンッ
ッズガ

いまだ一度も直接攻撃を受けては居ないが、吹っ飛ばされた岩とか飛んでくるから、ひとたまりもない。

ッブン
またかわす。

ドゴッ
またかわす

次は尻尾だ。

とか予想してたら、いつの間にかレンがかくれてる岩に近づいてる、という事に気がついた。

おっおいいいい。やべぇってやべえええええ！

レンがかくれている岩は粉々になった。レンはそこに倒れていた。意識を失っているようだ。しかも、ストーンドレイクはめざとくその虫の息な人間を見つけた。

「レン！！」やばいっ、このままじゃ・・・

ストーンドレイクは
尻尾を振り上げて、
容赦なく
振り下ろした。

問．5　何故・・・？（後書き）

ながくなっちった。てへ。
いや、きもい。自分で寒気がした。
とりあえず、読んだヒトは、意見とか送ってちょーだい。
待っております。

問．6　2回死んだら？（前書き）

人間死ぬ時は何処にいても死ぬ。
自分の命を惜しんで
こそこそ隠れているような者に
誰がついてくるというのだ。

フィディル・カストロ（国家元首）

問．6　2回死んだら？

今度こそ、死んだと思う。
あの世界に行ってすぐ死んだ。
なんとも恐ろしい世界だった。普通に化け物居るとか。
で、その化け物にやられた訳だが。
まあ、なんと言うか、後悔はしてない。俺の死に様は、そう悪いもんじゃなかったと思う。
強いて言うなら、相棒（レン）護りきったと言えない所か。
大丈夫かいな。
そーいや俺死ぬん2回目やったわ。天国地獄どっち行くんかね？

「はろー」

［しにがみさまがあらわれた！！］　BGM＝ドラ○エ　ボス戦闘テーマ

「いやー、見事な死にっぷりだったな」
「褒めてんのそれ」
「まーね。実際あんな事できる人、そーいないっしょ？」
そーかね。
死神に死に様を褒められるのはなんか微妙。
「なんにせよ、君はこれで二回死んだ訳だ」

ストーンドレイクが尻尾を振り下ろす瞬間に、粉骨砕身の走りで俺はレンとストーンドレイクの間に入り、粉骨砕身の力でレンを突き飛ばし、粉骨砕身の覚悟で振り下ろされた尻尾をもろに頭で受け止

め、
文字通り粉骨砕身にされて、
死亡。

その後レンがどうなったかわからない。
ただ、この死の世界(つぼいところ)に来ていないところを見ると、無事なのだろう。
というかそうであって欲しい。

いっぽう俺は再びここにやって来たという事だ。
やはり死んだのだと思うが、
こう、あんま実感無い。
なんでかな。

「そんでねぇ・・・」ヤツは続ける。
「君、まだ死んでないのよな」
ほー、どーりで実感無い訳だ。
理由は単純。まだ死んでないからだ・・・
「ってアホか！」んなわけあるか！
「いやー、君って不思議だね。死なないんだね。これを君が元居た世界では「ちー(不死身)と」というんだよね。もうなんかシナリオとかなんもかもおかまいなし。すげー」
「いやいやいやいや、どうなんの俺？」とかいいつつ「死後の世界で戦う少年少女」のアニメを思い出す。

まあ、そういう事なら、俺は喜んでＳＳＳに参りたい所存でございまする。

「うん、私は君の事が気に入ったよ。君、
死神にならないか？」

は？ＳＨＩＮＩＧＡＭＩっすか？それはどういった・・・

ヤツは言う

「死神にならないか？ってかなれ」

っはっはっは。ナニヲイッテイルノヤラサッパリッワカランノウ。

「現実逃避しとらんと、早う死神になれ」

すんません。しにがみってやっぱあの「死神」なのよね・・・

「・・・マジっスか？」

「マジだよマジ。まじで大まじでお前に死神になってもらう」

「いや、死神ってそんな簡単になれるもんなん？てか何、あんた引退すんの？」

「うーん、２回死んだ生き物は、死神になれるんだな。これが。なるかどうかはそいつ次第だけどさ」

「え？あんたも２回死んだの？」じゃあ、俺の現象あんま珍しくないじゃん！

「ああ、生きてるときに、心が死んで、そのあと精神が死んで。それで生きたまま、死神になった。精神的に二度の死んで死神になるのが一般的、つまり肉体的な死を２回も迎えた君はとても変だ」

ほええ！？なんか突っ込みどころが多すぎるんですけど・・・

しかも変態呼ばわりされた気がする。

なおもヤツは続ける。

「２回死んで、なおかつ魂は死ななかったやつだけが死神になれる。そんなんだから死神は私一人じゃない。何人でも死神になれる。ま

あ、あんまりたくさんはいないけど」
死神何人も居るとか、デ〇ノテか。
それに・・・
「いやー、ひとに死を運ぶしごとなんて・・・ねぇ？」
「だいじょーぶ。死神の仕事は死を運ぶんじゃなく、魂を運ぶというものなのさ」
「いやー、でも、ね？」
「だいじょーぶ」
それにしたって、
死神になってなんか得あんの？
いっそこのまま前も後ろも右も左も上も下もなく、白か黒かわからん不思議な景色のこの世界でニート生活も悪くないんじゃね？
「どっちにしろ、君はあの鎌の子を、ここまでつれてこないといけない。あの子は一人であの世界に居るべき存在じゃないからね」
なん…だ…と…？
「いま、レンは・・・？」
「今君の時間は進んでないんだ。だから、君があの世界（アノニムス）に戻ったら、君が死に損なった次の瞬間から、時が動くというわけ」
なるほど
「どうせ戻るんなら、死神になっとけよ」
「死神になったら・・・？」一応問う。

「君は、もう少し強くなる。死神の能力(ちから)を得る」
その能力(ちから)があれば・・・
「そしたら、護りたいものも、護れるのか・・・？」
「そいつは、君自身が決める事ができる。そのくらいの力が、君にはあるさ」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

というワケで、俺は死神になった(させられた)。
うん、もう何も言えねえ。

「じゃあ、行ってこーい」

まてまてまて
待てええぇぇぇぇい。
早速俺を送ろうとすんな。投げようとすんな。

「俺の能力(ちから)について教えろ」
「死神の能力(ちから)は個々によって異なるが、共通の力もいくつか持つ。
ヒトを遥かに上回る回復力を持ち日の当たらない所では姿を隠す事ができ空飛べて気弾が撃てる、あと死神の武器である鎌との相性が数段向上する」

うん、早口すぎて最後しかわからん
かったけど、だんだん解ってきた。

・・・うん？なんか、すげくね？
ドラゴン〇ール？
気弾とか、空飛ぶとか、再生能力とか・・・

「その個人能力が気になる・・・」
「それは、私にもわからん」

ですよね。

「まあ、慣れよ。慣れ。
という訳でいってらっしゃ～～～～い☆」

ヤツは、俺をがっしりと掴み、細腕とは思えない力でぶん投げた。

「ぎゃあああああぁぁぁぁぁ」

俺は自分の能力を使わずに飛んだ。

問．６　２回死んだら？（後書き）

ようやく、主人公が死神になってくれました。
パチパチパチっと
こっから、割とチートな感じにしたい。まあ、あくまで最強にはしないつもりだけども・・・

あとこの小説はフィクションですので、くれぐれも「試しに２回死のう」などと思わないように・・・

問．７　ｓｔｏｎｅとｒｏｃｋの違いは大きさだけか？（前書き）

人類はこれから１０００年たっても飛ぶことはできないだろう

ウィルバー・ライト

問．７　ｓｔｏｎｅとｒｏｃｋの違いは大きさだけか？

空を飛ぶというのは昔々からの人間の夢である。

飛行機で空を飛んだ某兄弟、気球で空を飛んだ某兄弟、
ろうでつくった翼で飛んだ某男、羽のはえた靴で飛んだ某英雄、箒で空を飛び回る輩、
某青いネコ型ロボットが不思議なポッケから取り出す科学的に見ればかなり危険な黄色いプロペラ、某七つの玉を集めて願いを叶えるアニメの空中を移動するアレ、某二頭身の目玉の息子が着ている黄色と黒のアレ、パーな人達が集うアレ、ウルトラなひとが地球に来るアレ、某ロボットアニメおよび漫画、某天使のアニメもしくは漫画などなど・・・

空を飛ぶ描写は枚挙に暇がない。

人間は昔から空を飛ぶことを夢見、実現しようとして来たのだ。

それはさておき、
俺は空を飛んでいる。
ついさっきまで、白か黒かわからん変なところにいたんだが、

俺は今、異世界の青空を飛んでいる。

勘違いしないで欲しい。
自分の意志で飛んでいるわけではない。

俺は、死神だ。チュウニと言われようとなんと言われようと、事実

である（らしい）。
自称死神のおかげで、死神になった。
そんなわけで「あい・きゃん・ふらい☆」な能力とか、手に入れたんだが、
現在はその仮面をかぶった自称死神に、赤帽のひげ男のごとくジャイアントスイングで投げられたせいで飛んでいるのである。

とはいえ、空を飛ぶのは気持ちいいものだ。いまは高速で飛んでいるから突風しか感じることができないが、それでも気分がいいのである、飛行機とは全然違う。
あたりまえだ。
人は空飛ぶことを夢見て来たのだから。
嗚呼、しかし、それは長く続かない。
なぜなら・・・

ーーーーーーーーーーーーー

力強いスイングで投げられ、飛ぶ俺。
異世界に戻って五秒後。

目の前に、岩があった。

「っのわああっっ！」

体をひねりなんとか回避し、

「ふべらっ！」

体の全面を叩き付けるように不時着した。

「ってて・・・いつか絶対あいつ殴る」
とぼやく俺の前には、
レンが横たわっていた。
苦悶の表情を浮かべ、頬にはひとすじの液体がつたっていた。

「「「GRRRAAAAAAAAA!!」」」
空気を揺るがす咆哮が響き渡る。
すぐ後ろでは、ストーンドレイクが殺気をみなぎらせていた。
でも、何も怖くない。負ける気がしない。
「ぎゃーぎゃー、ぎゃーぎゃーと、うるせぇんだよ」
地を蹴って岩の塊に挑む。

こんな『雑魚(ただの岩)』は素手で充分だ。

ーーーーーーーーーーーーーー

決着は一瞬だった。
大きな岩が宙を舞った。

ーーーーーーーーーーーーーー

「終わったか・・・」
息絶えたストーンドレイクから、ふわふわした球形の物体が浮かび上がった。

これは、もしや・・・！！

「「♪？？？？？～？」」

と俺の携帯が鳴った。

「なんで圏外なのにメール！？・・・しかも死神（上司）からかよ！！」

ーーーーーーーーーーーー【内容】

ｆｒｏｍ：君の上司の死神様

Ｓｂ　　：目の前のそれ

はろ～。登録よろすく☆

どう？死神のちから。パナイでしょ？

んでその丸い球体はお察しの通り、魂です。死神になったので見ることができるんよ～。

その球体、地に還してあげんと、化けるからｗｗｗ。

えーと、とりあえず捕まえて、気を送れば、消える、と思うから。

んで、それ仕事なんで、魂見つけたら早急に地に還してあげてね☆

あと、その世界、すでに先輩が３人くらいいるから。あったら挨拶すること。

おｋ？

じゃ、がんばって☆

ーーーーーーーーーーーーー【ハヤト】

ん？なんかいろいろ気になることがあるんだが・・・。

とりあえず、魂とやらを消しておくか。いや、地に還すんだっけ？

俺が魂に触れて気を送ると、魂はもやとなって、消えた。

おー、消えた。
これが仕事か。変なの。
んま、とりあえず、これでようやく、レンを助けたんだから・・・

あれ？俺、レンを異空間っぽいところで死神(上司)に引き渡して、ニート生活を送るはずだったんでは！？
てか、どうやってあそこに帰るんだ？
メールの内容もアイツにしてはなんか丁寧だし、
これは・・・

ちっくしょおお！
だましやがった！！
何だよ！何が死神だコラ！
おかげさまで、戻れなくなったじゃねぇか！
ニート生活も、平和も何もかも
まぼろし～～～、
っじゃねえか！ボケェッ！
なにが『がんばって☆』だ！
ざけんじゃねえ！

ーーーーーーーーーーーーーー

その後も胸中で死神(上司)を散々ののしり、ちょっと冷静になって初めて、俺はクエストなるものをしていてこんな目にあったのだと気づいた。
しかも、かなりランクとしては簡単とされるクエストのはずだ。
元地球人(補正)と死神の能力がなければ勝てなかったと思う。事実、一度死んだ。

とりあえず、山を降りよう。
と思ったそのとき
「あれー？あたし達のの獲物、もう倒されちゃってるよ～！？」
「本当ですか？」
という会話が聞こえた。
振り返ってみると、ピストル的な武器をもった金髪の女と、大剣二本を背負った紺色の髪をした男が、続いて上ってくるところだった。
「ねーねー、コレあんたが倒したの？」
「え？あー、はい」
ストーンドレイクのことか。
「頭を吹っ飛ばすなんて、やるわねー」
「・・・はぁ」
感心した様に言うのだが、思いっきり蹴っ飛ばしたら吹っ飛んだのだ。
「んで、これ、あたし達の獲物だったんだけど・・・報酬山分けにしてくれない？その頭もあげるから！」
「・・・獲物？」
「『ロックドラゴン討伐クエスト』です。あなたは、何をしにきたのですか？」
と、男が口を開いた。

「ロックドラゴン・・・？」

質問を質問で返してしまった。

「あなたが倒したのではないのですか？」

また質問。

「たしかにコイツを倒しました。っていうか俺が倒しに来たのは、ストーンドレイクなんですけど・・・」

「ストーンドレイクぅ？」

女が口を挟む。

「こりゃー、ロックドラゴンだよ？」

「えぇ、恐らく、あの辺りにころがっているのがストーンドレイクでしょう。ロックドラゴンはストーンドレイクを好んで食しますから・・・」

・・・ん？

問．７　ｓｔｏｎｅとｒｏｃｋの違いは大きさだけか？（後書き）

・・・ん？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6984n/

とある世界の死神の問題

2011年10月7日22時28分発行